

マテリアル娘。 INN  
OCENT—PR (パ  
ラレルレア) ~今日の  
なによ譚?! ~

タカヒロオー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日高町なのは（25）が目を覚ますと…子猫になっていた。しかもここは海鳴ではない海鳴？

マテリアル娘。と今日のにやこ譚のクロスですが、にやこ譚はイメージのみです。実験作なので面白かったら応援・評価・感想・ご指摘などお待ちしております。

# 目次

裏設定集①	1
なによ譚の1	4
なによ譚の2	10
なによ譚の3	20
なによ譚の4	26
なによ譚の5	32
なによ譚の6	39



# 裏設定集①

子猫なのは

INNOCENT世界の海鳴市に突如現れた推定0歳の子猫。

その中身は本編リリカルなのはFORCE時代の高町なのは（25歳）の潜在意識が具現化したもの。

実質的にはユニゾンデバイスに相当する魔力体の塊だが、転生当初は魔導師ランクS十、魔力ランクEの無茶ぶりステータス（笑）。

転生先の海鳴で、前の世界で別れたマテリアルズやフローリアン姉妹と再会し、家族（ペット）として迎え入れられた。

グラッツ博士が作成したマルチデバイス《レイジングハート・プシイ》を身につけていれば、普通にしゃべり、会話や（物凄く弱い）アクセル・シューターを使用できる。（当然人前では使わない）

ブレイブデュエルシミュレーターではザファイラやユーノ同様、元の姿を取り戻せるが、この世界のなのはと被るため…

※11歳当時の姿で髪は金色がかかった栗色のセミロングをお団子ヘヤーに。

※ジャケットはF O R C Eのフォートレスモードの色違い(青の部分が桜色)、装備もそれに準じて、ストライクカノン。顔バレ防止の為、保護グラスをかけている。

といった変更点がある。

使用デバイス：レイジングハート・プシィ

グランツ博士がシュテルのルシフェリオンのメモリーを参考に組み上げたマルチデバイス。

主な機能は子猫なのはの魔力制御と言葉の翻訳、そしてシュテルの猫フェロモン防止。(笑)

人格はルシフェリオンの記憶を元にレイジングハートを再現して構築されている。

魔力プール機能を搭載していて、フル充填状態であれば人間の姿に戻ることも可能に。

ただし燃費は悪く、丸1日が限界。しかも再充填には1ヶ月必要。

マテリアルズ&フローリアン家

子猫なのと同じ時空世界の出身。

砕け得ぬ闇事件終了後、エルトリアへと帰還したマテリアルズ&フローリアン姉妹だったが、時すでにエルトリアは手遅れと化していた。

アミティエとキリエは大病を患う父・グランツを助けるため、母親とマテリアルズと

共に平穩な地を目指して最後の時空跳躍を行う。

そして辿り着いたのが：平行世界の海鳴市だった。

不思議な事に不治の病だったはずのグランツは健康を取り戻し、転送時に持ち込んでいた貴金属を売却したお金でグランツ研究所を立ち上げた。

そしてアマタとキリエは高校（E・G・H／エルトリア・ガールズ・ハイスクール）に、  
ディアーチエ・シュテル・レヴィは私立天央中に通う事となった。

現在フローリアン婦人は仕事の為北海道に単身赴任中で家事はディアーチエとシュテルが行っている。

そしてグランツはこの世界のプレシア、リンデイ（T&H）はやて（八神堂）と共に魔導師体験型シミュレーター・ブレイブデュエルを開発、全国展開を開始する。

現在の時間軸は漫画版INNOCENT終了時～INNOCENTS開始時の間ぐらい。

# なによ譚の1

SIDE:なのは

…みなさんこんにちは。わたしはなのは、0歳の子猫です。…え?へ時空管理局の白い魔王と同じ名前だって?

…多分それわたし的事了です。(怒)

昨日わたしは、六課のオフィスで残業して事務処理をしていた…はずだったのに、目が覚めたらこんなことに。

ちなみに今のわたしは白毛で耳と両足、しっぽが青っぽい色の子猫…つてどこのアニメ?!

それで今わたしは…

「フギャアッ!!」

「ひいひいっ?!」

…只今イタチに追われて生命の危機にたたされてますっ?!

レイジングハートもない今、わたしにできるのは全力全開で逃げるだけっ?!そんなわたしの目の前に現れたのは広いお庭のある近未来的な建物。…あの柵の隙間、今のわ

たしなら通れるっ?!

ドタドタドタタ…スッ!

わたしは柵の隙間をくぐり抜け振り向くと…

「クギユルル…」

イタチは柵の隙間を潜れずに悔しがってる。…はあ、なんとか助かったの。でもここは一体どこなんだろう…?

辺りを見渡すとそこは彩りの花が咲き乱れる庭園だった。わたしはお花には詳しくないけど、それでもきちつと手入れされてるのがよくわかる。

風と共に甘い香りが…つてあれ?

わたしはその時身体と心に起きた異変に気付いた。

…何だか頭がふわふわしてとつても気持ちがいい。まるでお母さんのスイーツを食べた後の幸せな気分…。

それに身体もふわふわして…このまま…ずっと…いいよね♪

…考えるのも億劫になったわたしはあっさり思考を放棄してしまった…。

NO SIDE

…突然動きを止め目を閉じていたなのは再び目を開ける。

「……………にゃあ♪」

しかしその瞳はとろんと虚ろで、意思は感じられなかった。

「……にやあ……にや!」

なのはは軽く伸びをすると左前足で顔を洗う仕草をする。しかし……その瞳に意思の光は戻らない。

やがてなのははふらふらした足取りでどこかに歩き始める。それはまるで何かに誘われたように……。

S I D E : ????

「……のう……」

はい、何ですか王?

「今更ながら聞くが……暑くないのか、それは……?」

我らが王、ディアーチエ・K・クローディアに尋ねられ、わたしは首を傾げた。

「……何がですか?」

「……いや、いい……」

そこにやってきたのは我らが盟主、ユーリ・エーベルヴァイン。

「シユテル、ディアーチエは猫さんがそんなに居て暑くないか、つて聞いてると思いますよ……」

なんと。……この猫たちは私の友達ですから全然気になりませんよ、王?

「ぬ、そうか。それにしても…こやつら、いったいどこから集まるのやら。」

さあ…それは私にも。それはそうと王、そろそろ…

「王さま、シユテルン、ユーリ、たっだいまっつ！」

予想通り帰ってきたのは私や王と同じマテリアルズの一員、レヴィ・ラツセル。

「うっわあ、いつもながらシユテルンの周りは猫がいっぱいだねえ〜…あれ、この子新顔？」

レヴィはわたしの頭の上に張り付いていた子猫を持ち上げ目の前に差し出す。

そこには白い毛で耳と両足、しっぽが青っぽい色の子猫。見たところメスのようですが…

「うわあ、つ、可愛いですう！」

「うむ、確かに見ぬ顔だな。しかしこやつ何処かで見たとかな…」

…王ですか。私もこの子には何処かであったような気が…はて？

「…なんかこの子、シユテルンのオリジナルみたいだね〜…そう、高町なには、あの子みたいっ！」

(……………!!)

私と王は顔を見合せ、同時に子猫の顔を見る。

…確かにこの白と青のカラーリングはあの子のバリアジャケットと同じ…？でもま

さか……？

「……にやあ？……にやあ……Z z z……」

……寝てしまいましたか。しかし少し気になりますね……

私は研究室に籠っているはずのある人に連絡をとる。

「……博士、聞こえますか？少し相談したいことが……」

しばらくすると空中にホログラフィー映像で壮年の男性が映し出される。

この人の名前はグランツ・フロリアン。私達紫天の騎士がホームステイしているフロリアン家の主で、色々チートな頭脳の持ち主です。

『やあシユテル。もうお昼かい？』

「……6日目の、ですが。……それより博士、実は……」

私は子猫の事を伝える。博士は私達の正体は知っている。……勿論、魔法のことも。

『……その子がなのは君の？……しかしなのは君は……』

「はい、高町なのははへこの世界へにも存在しています。だからもしかするとこの子はへ私達のいた世界へのなのはおか、と……。」

「……解ったよシユテル。とりあえずその子連れて研究室に来てくれるかい？あとディ

アーチェは……」

「……わかりました。食事の準備はしておきます。」

「ぼくカレーっ！」

「わたしはハンバーグでっ！」

「…了解です、すぐにそちらに。…私は海老フライでお願いします、王。（チラリ）」

私、レヴィ、ユーリにリクエストされた王は苦笑い。

「シユテル、お前もか?!…まあ、考慮しておこう。」

是非ともお願いします。…さて、この子はいったい…面白くなりそうです♪

## なによ譚の2

前回のあらすじ

ある日高町なのはが目覚めると、子猫になっていた。戸惑うのはだがシユテルのフェロモン(?)に当てられ…ふらふらとシユテルの元へ。

一方子猫がなのはと推測したシユテルは、グランツ博士に分析を依頼した。果たしてその結果は？

SIDE：シユテル

「…どうですか、博士？」

私が尋ねるとグランツ博士は頷きながら答える。

「…どうやらシユテル君の推察が正しいみたいだね。ほら、みてごらん。」

博士に促されて子猫の方を見ると…なんと。

「うわあ〜っ、綺麗なピンクですう！」

子猫は鮮やかな桃色…というよりこれは…。

「…ピンクというより桜色だな、これは…」

「なによはの魔力光と同じ色…だよね？」

そう。この色は私のオリジナル・高町なのは魔道光の色。

「…しかもこの子の身体を調べてみたんだけど、100%魔力体：ユニゾンデバイスみたいなものだね。少なくとも普通の子猫ではないね。」

グランツ博士の分析結果に私は頷く。

「ところで博士、先程お願いしたモノは…？」

「ん？もうできてるよ、ほら！」

そう言つて博士が取り出したのは赤い宝石のついた金色の首輪。

「君のルシフェリオンのメモリーから取ったデータで人格は形成したけど、それで良かったのかい？」

「…はい。元々ルシフェリオンと〈彼女〉は双子の姉妹みたいな物なので。適応率は高いと思います。」

博士は私の言葉に頷くと首輪を私に手渡し、子猫の入っていたカプセルを開けた。

「さあ、起こしてあげるといいよ…君の〈友達〉をね。」

友達…そうですね。〈あちら〉の世界では無理でしたが、この世界なら…

私はカプセルに近づき、眠つたままの子猫を揺する。

「…起きてください、ナノハ…」

S I D E : ナノハ

『…てくだ…ナノ…』

…ん、あと少し…

「起きてください、ナノハ。」

ふえっ?!

突然身体を揺すられ、わたしは目を覚ました。…回りを見渡すとそこは研究室みたいな場所。そしてわたしを見つめているのは…

「お、目が覚めたようだね。」

壮年の白衣を着た男性と…

「…私の事がわかりますか、ナノハ?」

赤い髪の毛をショートカットにした9〜10歳ぐらいの少女。…あれ、この娘どこかで逢ったような…

ズキッ!

「痛っ?!」

突然頭の奥が痛くなり、それと同時に眠っていた記憶が呼び戻されていく。

「あなた…シユテル?」

思わず呟いたわたしだったけど…あれ?

「はい。…久しぶりですね、ナノハ。」

「うん、久しぶり…ってなんでわたし猫のままじゃべれるの?!」  
さつきまでじゃべれなかったのに…

『それは私が翻訳してるからですよ、マスター。』

えっ、今の声って…まさか？

「…レイジングハート…レイジングハートなの?!」

その声はわたしの首に巻かれた首輪から。見てみるとそれはまさしくわたしの長年のパートナー、レイジングハートだった。

『はい。もっとも貴女の知っている〈彼女〉とは違うのですが。』

???…それはどういう…?

「あく、ここからは僕から説明するよ。」

白衣を着た男性が腑に落ちないわたしに声をかけてきた。この人は一体…

「あ、自己紹介がまだだったね。…僕の名前はグランツ・フロリアン。…アミティエとキリエの父親と言えば分かるかな？」

…!

アミタさんとキリエさん！記憶封鎖が解かれわたしは過去の記憶を紐解いていく。

あれは闇の書事件の少し後。〈碎け得ぬ闇／アンブレイカブル・ダーク〉を巡る戦いにおいて、わたしやフェイトちゃんたちはシユテルを初めとするマテリアルズやアミタさ

んたちとと共に戦い、事件を解決させた。

確かあの後、アミタさんたちの故郷・エルトリアの復興の為に旅立ったはずじゃあ……？

「……残念ながら、エルトリアの滅亡は止める事ができなかったんだ。だから僕たちは魔力の全てを駆使して新たな永住の地を求めて転送した。……其がここ、海鳴市だったんだ。」

ええっ?! ここ海鳴だったのっ? ……でも海鳴にこんな場所……まさか?

「……そう、ここは君の生まれ故郷の海鳴市じゃない。いわゆる〈平行世界〉の海鳴市なんだ。」

グランツさんはわたしの側にパイプ椅子を置き座る。

……確かユーノくんから聞いた事がある。次元世界にはよく似ているけど微妙に違う平行世界が存在するって……まさかここがそうだなって……

「時間軸的には君とシユテル達が出会った頃……君たちが9歳の頃だね。基本的には差違はないんだけど根本的に違うのは……この世界にはミッドチルダは存在しない。すなわち魔導師もいないんだ。」

「えっ? でもシユテルたちは……?」

「もちろん私たちは使えますが、この世界では使う必要がないので使わないように生活

しています。」

そうなんだ…ち、ちよつと待って?!

「グランツさん!こ…」

「あ、僕のこととは博士、つて呼んでほしいな。」

「…じゃあグランツ博士、この世界にもわたしやフェイトちゃん、はやてちゃんも存在してるんですか?」

わたしの質問にグランツ博士は笑みを浮かべて頷く。

「いい質問だね。…確かにこの世界にも君たちは存在する。たださっきもいった通り、この世界にはミッドチルダや魔法は存在しないから、フェイトくんやクロノくん、ヴォルケンリッターの面々もあくまで普通の人間としてこの海鳴で暮らしているんだ。」

「ちなみに私達とこの世界のナノハたちは友人関係を築いています。またいずれ紹介しますよ。」

そうなんだ…でも友達になってくれるのは嬉しいかも。

「あとびつくりするかもしれないから言っておくと…」

『博士、〈T&H〉さんから通信です〜っ!』

話に割り込むようにスクリーンに現れたのはユーリ。

『あ、ナノハさん…なんですか?』

「うん。久しぶりだねユーリ…元気だった？」

「はいっ！その節はお世話に…じやなかった、通信繋いでよろしいですか？」

「ちよつと待つて…なのは君、しばらく喋るのは無しで。いいね？」

わたしは頷く。一般の人が見たら驚くもんね。

「ユーリ、繋げていいよ。」

グランツ博士が声をかけるとスクリーンの映像が切り替わり現れたのは…！

(り、リンデイさん?!…それに隣に居るの…つてまさか?!)

「やあ、プレシア女史にリンデイさん。先日のイベントはご協力ありがとうございました。ございました。」

「こちらこそデータクマテリアルズに参戦してもらえたお陰で盛り上がりましたわ。それでなんですけど…」

わたしはグランツ博士とリンデイさん達が話すのを呆然と聞いていた。

(えっ、えっ、なんでプレシアさんが生きてるの?しかも無茶苦茶元気そうだし?!)

さらに追い討ちをかけるように、

「博士、こんにちわっ！」

「やあアリシア君、相変わらず元気そうだね。」

「もつちろん!!」

(…やっぱりアリシアさんも生きてるんだ…)

「…それじゃ、次回もよろしくお願いします、プレシア女史。」

「ええっ、了解しましたわ、グランツ博士。それじゃあ…」

話が終わったらしく、通信が切れる。

「…わかったと思うけど、こっちの世界ではプレシア・テスタロッサもアリシア・テスタロッサも生きている。…まあ、魔法のない世界だからね。」

そっか…あれ? それじゃあもしかしてフェイトちゃんは生まれて…

「…大丈夫、フェイトちゃんはアリシアちゃんの妹として生まれてるよ。…ある意味この世界は…みんなの理想が詰まった世界かもしれないね。」

「みんなの理想?!」

グランツ博士の話は続く。

「そう。この世界はプレシア女史がアリシアちゃんとフェイトちゃん、2人の子供に恵まれた世界だ。…そしてそれはテスタロッサ一家全員が望んだ世界…違うかい?」

…確かに。フェイトちゃんが闇の書事件のあとに言ってた。閉じ込められたあの世界が現実だったら…って。

「更に補則するなら、この世界の八神はやては騎士たちだけでなく、リインフォース・アインスも共に〈家族〉として暮らしています。…これは推測ですが…ナノハ、貴女は『こ

んな世界を見てみたい」、そう望んだのでは？」

…?!

…そうだ、思い出した…確かに意識の奥底でそんなことを…

「多分その潜在意識が具現化する形で転生したのかもしれないね。だとしたら向こうの世界には…」

「…戻れない…つて事ですね。」

わたしは潜在意識だけの存在、ということとは向こうの世界のわたしはそのまま存在するということ。

「…ナノハ。もしよろしければここで私達と暮らす気はないですか？」

えっ…

「以前の世界では貴女に助けられました。今度は私達が貴女を助ける番です。…いいですよね、博士？」

「もちろんだよ！君には僕達がいなくなった後の世界のこと聞きたいしね。」

シユテル、博士…。

「…ありがとうございます。…お世話になります！」

わたしは2人に頭を下げる。

「さあ、そうと決まったらまずは君の名前を考えないとね！」

…はいつ?!

「それはそうですね…この世界には別の高町なのはが存在しますから。」

あ、そうか。誰が考えてくれるんだろ…楽しみっ!

## なによ譚の3

前回のあらすじ

なぜか子猫になって平行世界の海鳴市（INNOCENT）に転生してしまった高町なのは（25）は、同じくこの世界に来ていたマテリアルズ（ディアーチェ・シユテル・レヴィ・ユーリ）と再会し、グランツ博士から自分の存在理由、そして元の世界には戻れないだろうと告げられる。

納得しつつも落胆する子猫なのはにシユテルは、「私たちと一緒に暮らしませんか？」と誘う。

子猫なのはは感謝してそれを受け入れ、新しい生活が始まる…はずだったんだけど…？

SIDE：シユテル

「ドラゴンズロアーっ！」

「プティアンジュがいいですっ！」

「…いっそハラキリク…」

…レヴィ、ナノハは女性ですよ。ユーリ、その名前は…あと王、それは猫じゃ無くて

ウサギです。

「「え〜〜つ?!」」

…現在私達は子猫になったナノハの名前を考えている最中なのですが…

「にやはは…自分の名前が決められるのがこんな恥ずかしいなんて思わなかったの…

(遠い目)」

…すいませんナノハ。それでは私が良き名を…ヘルナ・フローレンス・ムーンパレス

…

「ちよつとシユテル長すぎつ?!…残念だけど却下するの…(汗)」

…なんと。良き名だと思ったのですが…(ガチャ)…おや、どうやらアミティエとキ

リエが帰ってきたみたいですね。

「ただいまあ〜つ!」

「ただいま・無事に・帰りましたのT・B・Kよくん!…つてあれ、みんな集まって何やつ

てん…」

「あ、アミティエさん、キリエさん!お久し振りです。…なのはです。」

「?!」

子猫のナノハが挨拶すると…流石に驚いたようですね。

「ほ、ホントになのはちゃんなのっ?!」

「何でっ？なのはちやん何で?! キリエ、とつてもパニックのK・T・Pよくんっ！」

…落ち着いてください、2人とも。私は2人に事情を説明する。

「はあ…それじゃあ貴女は〈魔法世界のなのはちや…なのはさんなんですね?」

「にやはは…なのはちやんでいいですよ、わたしもアミタちゃん、キリエちゃんって呼びますから。」

「そういつてもらえると助かるわ〜ん♪…でもあんな可愛かったなのはちやんが一児のママだなんて、お姉さん驚きよん?」

…確かに私もナノハと別れてから15年も経つているとは予想外でした。…ただ…。

「キリエ、貴女も私たちもナノハの娘には出逢っていますよ…そうですね、ナノハ?」  
私の問いかけにナノハは頷く。

「うん、わたしも今思い出したよ…。シユテル達やアミタちゃん、キリエちゃんと出逢ったあの時、ヴィヴィオやアインハルトちゃん、それにトーマたちも…」

…ええ、ナノハたちやあの子たちのお陰でユーリの暴走を止める事ができました、本当に感謝しています。

「うむ、そうだったのう。」

「あの時はお世話になりました〜っ!」

礼を言うユーリにナノハは顔を桜色に染めながら答える。

「べ、別にあれはわたしたちがやりたくてやっただけだから…それだけだよ。」

ふふっ、ナノハラらしい答えですね…あっ！

「ナノハ、貴女の名前ですが、サクラというのはいくつですか？ どうでしょう？ 桜色は貴女の魔力光の色ですし、名前の由来はそうですね…桜の木の下で見つけた事にすればいいかと。」

「…うん、それがいいのっ！ それじゃあ、よいしょつと…。」

ナノハは頷くと座っていた私の膝から飛び降り、皆が見渡せるテーブルの上に。

「にやはは…それじゃ、高町なのは改めへサクラ、皆様の家族の一員になります。これからよろしく願います！」

ナノハ改めサクラの挨拶に私達は笑顔で応える。

「ああ、宜しく頼むよサクラくん。」

「一緒にいっぱい遊ぼうね、サクラっ！」

「これからよろしくですう〜！」

「向こうの世界の事も教えてくださいねっ！」

「何は、ともあれ、ヨロシク！のN・T・Y〜」

「…前の世界では世話になったからな…まあこちらの世界の事は任せておけ。」

「…と言うわけですから宜しく願いますよ、サクラ？」

「…うんっ!!」

こうして新しい家族・サクラを加えた物語が始まった頃、私たちの隣でも何かが…

NO SIDE

時同じ頃事件はグランツ研究所の隣に住む青年・荒川潮（あらかわ・うしお）の自宅庭で起きていた。

「お〜い、ごはんだぞ〜っ?!」

潮は小魚を数匹と野菜の葉っぱの盛り付けられた器を茂みの前に置く。すると…

「クアツ?!」

茂みの奥から現れたのは黒い色をしたアヒルが一羽。

アヒルは餌を美味しそうに食べ始める。

「どうだ、旨いか?」

「クワツ!」

潮はその様子を見ると立ち上がり空を見上げる。

「さあ、今日こそ頑張つてあの人から一本とつてやるっ!…じゃ、大人しくついてくるんだぞ、〈ふえいと〉?」

〈ふえいと〉と呼ばれたアヒルは頭を撫でられると嬉しそうに、

「クワ〜ツ!」

と一鳴き。

果たして荒川 潮とは何者なのか？そしてアヒルの正体は？…それは次回の講釈で。

## なによ譚の4

前回のあらすじ

時空管理局の一等空尉・高町なのは(25)はその思念が子猫の姿をとり、本来居るべき世界から「誰もが幸せな世界」へと転生する。

そしてそんな彼女を助けてくれたのは、紫天の書の一家…マテリアルズとフローリアン親子だった。

こうしてシユテルから新しい名前を付けて貰ったのはは子猫のサクラとして第2の猫生?を始める。

…そんなある日、サクラはユーリと共にお散歩に行くことに。

SIDE：サクラ

『…ふええ〜つ、子猫の目から見るとこんな風に見えるんだ〜つ…』

わたしはユーリの肩から海鳴の街を眺める。

(フェレットの時のユーノくんもこんな感じだったのかなあ?)

「ふふふつ、サクラさんの知ってる海鳴と違いはありますか?」

『そうだなあ…なんとなくだけど、子供の頃の海鳴って感じがするなあ。…確かこの世

界のわたしたちって小学生なんだよね?…」

わたしの質問にユーリは頷く。

「はいっ!ちようど向こうの世界で出会った頃のサクラさん(なのは)と同じくらいですね。」

…って事は小学3〜4年生ぐらいかな?会うのが楽しみなのっ!

「あつ、いけないっ?!:サクラさん、ちよつと寄り道してもいいですか?」

『うん、いいけど…どこへ行くの?』

「へへへっ…それは内緒です。でも、ちよつとびつくりするかも知れませんがよ。」

そう言つてユーリは悪戯っぽく笑う。…うくん、可愛いなあ〜ユーリ…

そうこうしてゐる内にユーリは商店街の外れの方へ。…こんな所に何が…つて…ええっ?!

ユーリが止まった先に建つていたのは…

〈古書全般・八神堂〉

(や、八神堂つて…まさかここつてはやてちゃんの?!)

「…ここが八神堂…八神はやてさんとその家族さんたちのお家です。ふふっ…びつくりしました?」

そりやもう?!だつてわたしたちの世界のはやてちゃんはグレアムさんの援助を受け

て生活してたから…

『…じゃあこの世界のはやてちゃんは両親とも健在なの?』

わたしの当然の疑問にユーリは首を横に振る。

「いいえ、はやてさんはヴォルケンリツターの皆さんと暮らしています。シグナムさん、ヴィータちゃん、シャマルさん…それにアインスさんと狼のザフィーラですね。」

そつか…:そういうえばアインスさんもいるって言ってたっけ。

『キユイッッ!』

バシッ!

『な、なにっ?なんか飛んできたっ?!』

衝撃を感じてふとユーリの顔を見上げると…

「きやはっ、くすぐりたいですよナハト?!」

ユーリにじやれていたのはわたしと同じカラーリング(白↓青)の子供の…:狐?でも背中には小さな羽があるし…:ユーリ、この子はいったい…:

「あ、サクラさんにも紹介しますね?この子はナハト。八神家に飼われているハネキツネなんですう。」

ハネキツネ?!わたしたちの世界にはそんな動物居なかったよね…:

「…どうかしたのかナハト…:ってなんだ、ユーリか。…いらっしやい、ユーリ。」

店の中から出てきたのはエプロン姿のアインスさん。なんていうか…わたしの記憶にある彼女より表情が柔らかな気がする。

「こんにちはアインス！この間ダイアーチェがお願いしていた本が届いたと聞いたので取りに来ました！」

「ああ、届いてるよ。とりあえず立ち話もなんだから店に入つて。ちようど主の作ったおはぎがあるんだ、一緒にどうだい？」

「はい、いただきますっ！」

アインスさんはユーリにじやれていたナハトを受けとると肩の上に乗せ店の中へ。わたしとユーリも続けて中に入ると…

（わあ…古い本で一杯だあ…そういえばはやてちゃんつて読書が趣味だったよね。）

管理局に勤めるようになってからでも合間見ながら読んでたもんなあ。

「まあその席に座つて。…ところでユーリ、その子猫は初顔だね？」

「はいっ、サクラっていうんです！昨日からうちの子になったんです。」

「サクラか…いい名前だね。よろしく、サク…?!」

アインスさんがわたしの頭に手を触れた途端に言葉を止める。

「…？どうしたんですかアインス？」

ユーリも心配そうに見つめる。

「いや……こんなところで再会できるとは思わなかったからね……久し振りだな、へ小さな勇者、高町なのは。」

『……………!!』

アインスさんの予想外の言葉に驚くわたしとユーリ。

わたしの正体を知っていて……なおかつわたしの事を「小さな勇者」って呼ぶのは……まさかっ?!

『あなた、……まさか「夜天の魔導書」の管制融合騎だった……リインフォースさん……なんですか?!』

わたしの問いに彼女ははにかんで頷く。

「ああ……そう言われていた事もあったね。だけど今の私はこの世界の八神はやての家族、八神リインフォース・アインスだよ。」

アインスさんは柵からおほぎをだしてテーブルの上に置くと椅子に座りお茶を入れてくれた。

「……幸い、主はやては外出中でしばらく帰って来ないからお話ししようか?……わたしがいなくなった後の世界の事も聞きたいしね。」

「アインス……わたしたちにも黙ってたなんてひどいですっ?!

「……と言うことはユーリもあの時闘ったU—Dということだね。別に黙ってたわけじゃ

ないけど…うん、いい機会だから一緒に聞いてくれるかい？」

うん、どうしてわたしたちの世界のアインスさんがここにいるのか知りたいし…お話を聞かせてほしいのっ！

## なによ譚の5

前回のあらすじ

ユーリと共に八神はやての家族が暮らす古書店〈八神堂〉を訪れたサクラは、八神リインフォース・アインスと出逢う。

しかし実は彼女、サクラやユーリが元いた世界のアインスだったのだ。

ともあれ事情を聞くため、2人は八神堂にお邪魔する事に…。

SIDE：サクラ

…ふええくっ、まさかこの世界の「八神リインフォース・アインス」さんが、わたしがもっていた世界の「夜天の管制融合騎のリインフォース・アインス」さんだったなんて…

「ユーリも知らなかったの?」

「今初めて知りました…隠してるなんてひどいですう?!」

ユーリが淋しそうに呟く。…と同時にアインスさんがお盆にお茶とおはぎをもつて現れた。

「すまないね、主はやては外出中だしシグナムやヴィータたちは学校だから…まあ、これ

でもどうぞ。主はやて特製のギガうまおはぎだよ。」

そういつて机に置かれたあんこのおはぎ…美味しそうな。(ジユルリツ)

「わ〜い、いただきますっ!」

ユーリは早速おはぎをほうばる。でもわたしは…

「…それでアインスさん、どうしてこの世界にいるのか説明…」

「さてどこから話したのかな?…この世界がいわゆる平行世界だというのは…」

うん、それはシユテルたちから聞いたの。みんなの理想が現実化した世界、それがこの世界だって。

「それなら話ははやい。…実はわたしたちがいたあの世界も、平行世界の1つだったんだ。」

……?! わたしとユーリは顔を見合わせる。

「…本来わたしは〈闇の書事件〉のあとすぐに、あの世界から消える…というのが正しい世界らしい。」

「そんなはず不是吗?! それじゃああの時わたしを助けてくれたアインスは…?!」

お、落ち着いてユーリ?…続けてもらえますか、アインスさん?

わたしが視線で問いかけると彼女は頷き話を続ける。

「…それなんだよユーリ。私はいわば『砕け得ぬ闇の存在によって命を承らえた』アイン

ス…といえぱいいのかな？ 実際私は君たちがエルトリアに戻ってからまもなく、その存在を失ったのだから…。」

うん、そういうことなら納得だよ。でも、どうしてこの世界に？

「なのは…いやサクラ、それは君がよく知ってるんじゃないのかな？…私も同じだよ、私も願ったんだ…『主はやて、そして騎士たちが静かに暮らす世界』をね。」

…！

「そうして次に目覚めたときには今の状態だった。…前の世界の我が主とこの世界の彼女が別人なのは百も承知している。無論騎士たちも同様だ。でも…」

アインスさんは言葉を濁しながらも話を続ける。

「この世界の主や騎士たちも間違いなく私の家族なんだ。元の世界にもどれないなら、今ここにある幸せを護りたい…そう思ってたね。」

アインスさん…

「えぐつ、えぐつ…アインス可哀想ですう…」

隣じゃユーリが涙ポロポロ流してる。

「泣かないでユーリ…私は『この世で一番幸せな魔導書』なんだ。だって最高の主に2度も巡り会えたんだからね。」

「アインス…はい、そうですよねっ！」

ユーリも笑顔に戻ってなによりなの。

「頼もう〜っ?!」

…何やらお店の方で大きな声が。なんなんだろう？

「やれやれ、またあの少年か。…そうだ、2人とも一緒にくるといい。」

ほえ?…わたしとユーリは導かれるままお店の方へ行くとそこには…

「こんにちはアインスさん!…今日こそは一本取りますよ!!」

「また君か潮(うしお)…いい加減諦めたらどうだ?」

アインスさんは呆れたしやべり方ながらも、まんざらでも無さそう。…これっでもしかして…

「もう…相変わらずですね、潮さん♪」

「あ、ユーリちゃん!君もいたんだ。王様たちは元気にしてるかい?」

『…ユーリ、この人はいったい誰なの?わたしは知らないと思うんだけど…』

わたしは念話でユーリと会話する。レイジングハートのおかげでこんな時でも話せるのは本当にありがたいなあ。

『この人は荒川 潮(あらかわ うしお)さん。グランツ研究所のお隣に住んでいて、ベルカスタイルのデュエリストなんですよ。』

デュエリスト…確かこの世界で流行している体感型の魔法戦闘シミュレーション(ペ

レイブデュエル〉のプレイヤーの総称だったっけ。

『グランツ博士やプレシアさんが共同で開発して、今3つの陣営…ホビーショップ・T&Hさんの〈ミッドチルダ〉、八神堂さんの〈ベルカ〉、そしてわたしたちグランツ研究所の〈インダストリー〉に別れて凌ぎを削ってるんですっ!』

潮さんと話をしながらもわたしの質問に答えてくれるユーリ。この辺は魔導師の必須スキル・マルチタスクの賜物だね。

『…でもそれならなんでベルカなの? お隣さんならインダストリーなんじゃあ?』  
『ふふっ、それはですねえ…♪』

ユーリの視線の先にはアインスにデレツとする潮さん。

「アインスさん、デュエルに勝ったら約束通りデートしてくださいね!」

「…そう言いつつ今まで何連敗してたかな?」

「…491連敗っす。でも今日こそは!」

…なるほど、納得なの。

「仕方ないね。…そういえばあの子は今日は?」

「もちろん連れて来てますよ。ほら、こっちこいふえいと!」

えっ、今フエイトって…

「クワツ!」

鳴き声と共に入って来たのは黒い羽色が綺麗な…アヒル？

「あ、ふえいと久しぶりですう！」

ユーリも近づいてアヒルをナデナデする。

『ふえいと潮さんの飼ってるアヒルさんなんですう！とつても可愛いんですよ…つてサクラさん？』

ううっ…お、美味しそうな…（ジュルリツ）…見れば見るほど食べた…もうダメっ?!

わたしはユーリの胸元から飛び出しアヒルのふえいと向かって一直線！…いっただきま…？

その瞬間、頭の中に懐かしい声が…

『…なのは？…君はなのはなの?!』

わたしはその声に立ち止まり声のした方を見る。

そこには丸々とした黒い羽色のアヒル…ふえいとこの姿だけ。ま、まさか…

『あなた…フェイトちゃん…なの?』

『やっぱりなのはだ！逢いたかったよ、なのはあ…』

念話で話しかけてきたアヒルさんの目…間違いない、彼女はわたしの親友フェイト・テスタロツサ・ハラオウンなんだ。

でもどうしてフエイトちゃんがこの世界に？  
これはじっくりお話しなきゃなの！

## なによ譚の6

前回のあらすじ

八神堂を訪れたサクラとユーリは、リインフォース・アインズと知り合い、旧知の仲であった真実を知る。更にそのアインズを慕う青年、荒川 潮に連れられてきたアヒルのふえいと…その正体が自らが知る世界のフェイト・T・ハラオウンだと知り…

S I D E : サクラ

…こつちの世界に来て色々驚いたけど、これが一番ビックリなの。まさかフェイトちゃんまで、しかも…アヒルだなんて…(ジュルリツ)

『…な、なのは？何だか目が怖いよっ?!』

…ハッ！わたし今フェイトちゃんの事を『美味しそう』って…

『マスター、どうやら猫の本能が働いているようです。わたしがコントロールしてみます。』

お、お願いレイジングハート…でよかったのかな？確か正式名称は…

『正式名称はレイジングハート・プシイですが普通にレイジングハートでいいですよマスター。寧ろそう呼んでいただけなら光栄です。』

そう…それならよろしくねレイジングハート♪…うん、だいぶ落ち着いてきたの。

『よかった…今にも襲い掛かれそうだったよ…』

『にやはは、ごめんごめん。ところでフェイトちゃんは どうしてこの世界に、しかもアヒルだなんて…?』

わたしの問いにフェイトちゃんは首を左右に振る。

『それがわからないんだよなのは。正直意識がはつきりしたのはついさつきで、それまではぼんやりした感じだったから…。』

どうやら転生には個人差があるみたいなの。

『でも、なのはとのんびり過ごせたらいいなあ…とは思ってたけど。まさかこんな形で叶うなんて思ってもみなかった。』

それはわたしもだよフェイトちゃん。これからはまた仲良く遊ぼうね♪

『うん、もちろんだよなのは…でもどうしてレイジングハートがここにいるの?』

「それはですね〜」

そういいながらわたしたちを抱き上げたのはユーリ。

『え、ユーリ?』

フェイトちゃんはユーリが話に参加してきた事に驚いたみたい。

「はい。…お久し振りですね、フェイトさん。〈砕け得ぬ闇〉事件の時は大変お世話にな

りました。」

『えっ…それじゃあなたは紫天の盟主だったユーリなの？』

「はい。わたしの家族であるシテルやレヴィに、ディアーチエ、アマタ、キリエ…あとアインスもフェイトさんと同じ世界から来たんですよ？」

『……………（呆然）』

あ、とうとうフェイトちゃんが固まっちゃった。

『そんな事って…あるんだね。』

そうだね、わたしもこの世界に来た時は驚いたの。

でもわたしやフェイトちゃんがこの世界に来たのには必ず意味がある…わたしはそう信じてるよ？

「そうですね♪…それじゃふえいとさんのデバイスも博士に造ってもらいましょうか？ やっぱバルディッシュがいいですよね？」

いたずらっぽく笑ってユーリが提案する。

『うん。バルディッシュはわたしのパートナーだからね。』

「それじゃ早速博士とレヴィに連絡しときますね。早かったら帰る頃には完成してるかも。」

『『はやっ?!』』

さ、さすがにそれはないんじゃないや、グランツ博士だったらありえるかも…

「もしもし、博士ですか？ ユーリです。実は…」

ユーリが携帯電話でグランツ博士に報告。すると…

「今から造るから夕方にはできるかな？ …ですって。」

『……………』

…うん、深く考えないでおこう。そうしよう。

「おーい、ふえいとー？ そろそろ帰るぞ…はあ。」

声のした方を見るとアインスさんと潮さんが。

「あ、また負けちゃったみたいですね潮さん。…2人ともこつちですよ。」

ユーリが声をかけると2人はこちらに歩いてきた。

「潮さん、勝負の方は…『475連敗だよユーリちゃん…チクショー?!』やっぱり…」

「ん…？ どうしたんだいサクラ、妙にニコニコして…？」

「ふふふ…アインスさん、実はですね…」

ユーリがアインスさんに耳打ちするとアインスさんは驚いた表情に。そりやそうだよね。

「…まさか君までそうだったとはね…『でもまた逢えて嬉しいよ、へ小さな勇者』フェイ

ト』

潮さんにバレないように後半は念話で話してきたアインスさん。

『はい。わたしも貴女の事は心残りでしたから…またお逢いできて嬉しかったです。』

フェイトちゃんも喜んで…良かった良かった。

「あ、潮さん？博士が帰るときに研究所に寄って欲しいって…時間ありますか？」

「おう、大丈夫だよ。何の用だろ？」

フェイトちゃんのバルディツシユ、出来上がってるかなあ…

「さあ、帰りましょうサクラ。みんな待ってますよ？」

は…いつ…今日はアインスさんやフェイトちゃんと再会できたし、最高の1日だったの！